

鉄兜団 (*Der Stahlhelm*)—前線兵士同盟 20世紀ドイツの右翼運動

デニス・ヴェルベルク

はじめに

2014年7月3日、第一次世界大戦開戦から100年にあたり、フランス系ドイツ人の政治学者アルフレッド・グローセルがドイツ議会で講演を行った。戦争の結果とそれが欧州にとって持つ意味に関する講演で、彼は、1918年の軍事的敗北を受け入れることを拒んだ、1918年以降のドイツ社会の一部集団について詳しく論じた。これが、20世紀において最も大きな影響力を持った政治的言説の一つである「背後からの一突き」(*Dolchstoßlegende*)につながった¹。この言説に従えば、ドイツ軍は戦場で敗北したのではなく、銃後の裏切りと弱気のせいで倒されたのだという。戦後、右派政党や右派団体は、裏切りの直接的な産物としてワイマール共和国の正統性を否定し、同政府の代表とその支持者を攻撃するためにこの神話を利用した²。その元凶の一つが、「ドイツの百戦錬磨で負け知らずの前線兵士と若者によって構成される、臨戦態勢の同盟」と自らを定義した鉄兜団—前線兵士同盟 (*Stahlhelm - Bund der Frontsoldaten*)であった³。アルフレッド・グローセルは、こうした背景に基づき、その規模と重要性にもかかわらず歴史研究では謎に包まれた存在であった、ワイマール共和制時代の闘争同盟と政治運動の記憶を呼び起こした。本稿では、政治的主体としての鉄兜団の概要、及び1920年代と30年代前半のドイツの右派の中で、主要な挑戦者にしてライ

¹ 以下を参照。100. Jahrestag des Beginns des Ersten Weltkriegs. Gedenkstunde im Plenarsaal des Deutschen Bundestages am 3. Juli 2014. Ansprache von Professor Dr. Alfred Grosser <<https://www.bundesregierung.de/Content/DE/Bulletin/2010-2015/2014/07/81-2-grosser-gedenken-bt.html>> (last access: 21 July 2021).

² 以下を参照。Barth, Boris, *Dolchstoßlegenden und politische Desintegration. Das Trauma der deutschen Niederlage im Ersten Weltkrieg 1914-1933* (= Schriften des Bundesarchivs Vol. 61), Düsseldorf 2003.

³ „Das erlaubte dem bis 1933 immer mächtigeren Stahlhelm, sich folgendermaßen zu definieren: *Bund der schlachterproben, unbesiegt heimgekehrten deutschen Frontsoldaten und der von ihnen zur Wehrhaftigkeit erzogenen Jungmannen.*“ (100. Jahrestag des Beginns des Ersten Weltkriegs).

バルとなった国民社会主義(ナチス)運動との関係を紹介する。そこで第1節では、これらの二つの運動が第一次世界大戦をたたえ、この大戦を政治目的で利用する上で生じた様々な形の対立を分析する。第2節では、暴力的衝突にまで発展した、公共空間における両運動の優位性をめぐる争いについて説明する。加えて、短い第3節では、1945年以降に新たに設立された退役軍人組織に目を向ける。

鉄兜団 (*Stahlhelm*) は、第一次世界大戦に参加したドイツの退役軍人から成る組織であり、1918年11月の敗戦と革命を経て設立された。退役軍人による非政治的な結社として発足し、最初の地方支部は革命による混乱を防ぐ自衛組織の意味合いを持ち、法と秩序を維持するために新政府を援助していた。しかしながら、早い段階で反民主主義、権威主義を唱える右派の急進的傾向が強まり、鉄兜団はワイマール共和国の自由民主主義体制と次第に敵対するようになった。鉄兜団の創設者にして初代の連邦指導者 (*Bundesführer*) のフランツ・ゼルテは、急進的な集団を説得して、同団連邦指導部が支持する比較的穏健な立場に移行させようと何度か試みたが、これに失敗した後は、団の軌道修正を行うことはなかった。大戦後に部隊——義勇軍や自警団・自衛組織などの他の非正規部隊の混成——が解体されると、鉄兜団はこれらの元メンバーの多くを取り込み、それより小規模な各種のいわゆる闘争同盟を吸収した。こうすることで、鉄兜団は、1920年代後半には50～60万人の支持者を有する、右派による最も重要な大衆運動にまで成長した⁴。1925年から1932年に開催された全国年次大会 (*Reichsfrontsoldatentage*) に、鉄兜団の指導部は最大20万人を動員し、ドイツ主要都市の公共空間を占拠して、制服に身を固めた団員が隊列を作って行進し、同団の政治的要求に威光を添えた。鉄兜団による政治運動の最大の目標は、分裂した右派の組織、同盟、政党を結集して強力な政治連合を作り、ドイツを権威主義国家として再建することだとされた。退役軍人らを率いる指導部は、こうした文脈を踏まえてドイツの歴史全般、わけても第一次世界大戦に言及した。ドイ

⁴ Elsbach, Sebastian, *Das Reichsbanner Schwarz-Rot-Gold. Republikschutz und politische Gewalt in der Weimarer Republik* (Zugl. Diss. Phil., Universität Jena 2018), Stuttgart 2019 (= Weimarer Schriften zur Republik, 10), pp. 117-118.

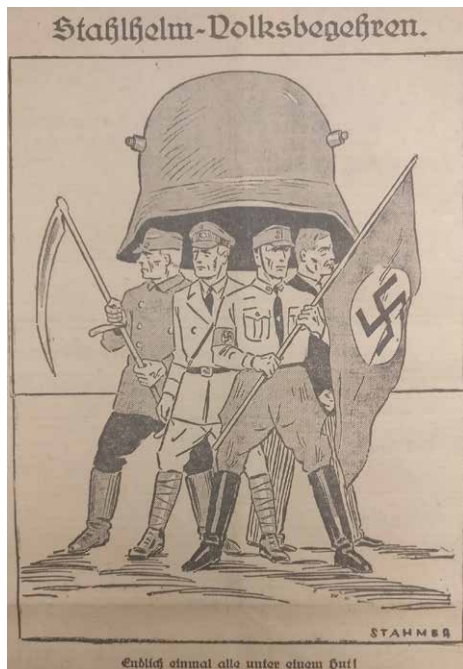
ツ国民はこれまで戦争によって団結してきたのだから、第一次世界大戦の眞の兵士が、今一度、国家主義勢力を再び一つにまとめるべきなのだ——彼らはそう主張した。大戦を大いなる結集の手段に利用することで、ドイツ国民を「一つの鉄兜の下に」統合することができるのだという。これはすなわち、ドイツを再び偉大な大国にするという、共通の目的のために団結することを意味する。鉄兜団とつながりがある『*Der Alte Dessauer*』紙に1931年に掲載された風刺画は、1866年の『*Berliner Punsch*』誌に描かれた別の挿絵を思い起こさせるものだった。後者は、1864～1871年のドイツ統一戦争を経て、オットー・フォン・ビスマルクがプロイセンの角付き兜の下でドイツを統一する未来を予見したものだ。そのメッセージは明白であり、ドイツは、角付き兜と鉄兜という、それぞれの時代に応じたかぶり物によって象徴される兵士の手で、統一されるべきなのだ、というものであった。

図1: 「強い団結心に導かれた大いなる俊敏性、活力、勇気——
30日で偉大な国民を一つの帽子の下に統一」



出典: 『*Berliner Punsch*』誌 (1866年8月25日)

図2:「ついに皆が一つの帽子の下に(ついに統一を果たす)」



出典:『Der Alte Dessauer』誌(Vol. 8, 15, 1931年4月11日)

中道右派から極右まで、あらゆる右派政党を傘下に収める組織として、鉄兜団は、国旗団黒赤金 (*Reichsbanner Schwarz-Rot-Gold*) の主要な敵対勢力であった。国旗団による運動は、社会民主党、中産階級リベラル派によるドイツ人民党、カトリック系政党の中央党 (*Zentrum*) などの、議会共和制を支持する諸政党や他の勢力のメンバーを一つに結集した。

同じ右派でありながら、鉄兜団と台頭しつつあったナチス運動との緊張と対立が次第に激しくなった。とはいえ両者は、共通の政治目標を達成するために時には協力することもあった。1920年代を通じて、国民社会主義者や他の過激な人種差別主義者は、特にユダヤ人に対する鉄兜団の指導部の穏健な立場を理由として、同団を攻撃した。彼らの狙いは、鉄兜団の指導部とその多様な支持基盤

の間に亀裂を作り、離反を促して、右派内で優位に立つためライバルを弱体化させることにあった⁵。1922年にはゼルテ自身が、自分の知る限り彼の組織には「ユダヤ人も非ユダヤ人もおらず、鉄兜団の団員しかいない」⁶と宣言した。ゼルテに最も近い人物の一人で、バイエルン連邦支部のトップを務めた退役少佐カール・リッター・フォン・ヴェーニンガーは、初期の国民社会主義ドイツ労働者党（ナチス党）から明確に距離を置き、自分の支持者らにもそうさせた。バイエルンの全組織に宛てた回状で、ヴェーニンガーは、急進的な反ユダヤ主義を次のように批判した。

「私の意見では、ドイツのように貧しく荒廃した国が、ユダヤ人迫害によってその問題を解決できると信じるのは愚かしく害をもたらすものである」⁷

とはいえ1920年代には、退役軍人から成る鉄兜団が右派の期待の星であった一方、ナチス運動は、バイエルン以外の選挙で大きな成功を取められなかった。そのため、ゼルテとその支持者は強い立場で主張することができた。ナチス党の機関紙で数々の非難を受けた後、鉄兜団が発行する機関紙の編集者を務めたヴィルヘルム・ハインツは、「良識人の最前線！」(*Die Front der Anständigen!*)と題した一面の記事でこの振る舞いを批判した。最高指導者のゼルテはアドルフ・ヒトラーに宛てた公開書簡の中で、ヒトラーの運動をつぶすと脅しをかけた⁸。とはいえ、政治的な右派全体の統一を目指す組織として、鉄兜団には、極右勢力との関係を断つ余裕はなかった。特にナチス党の誕生地であり初期の本拠地であったミュンヘンでは、ヴェーニンガーでさえ、「最も優れた活動家」であるナチス

⁵ 以下を参照。Longerich, Peter, *Geschichte der SA*, München 2003, pp. 70-71.

⁶ „nicht Juden oder Nichtjuden, sondern Stahlhelmleute“ (Berghahn, Volker R., *Der Stahlhelm Bund der Frontsoldaten 1918-1935* [Zugl. Diss. Phil Universität London 1964], Düsseldorf 1966 [= *Beiträge zur Geschichte des Parlamentarismus und der politischen Parteien*, 33], p. 66).

⁷ „Ich halte es für eine schädliche Torheit, wenn ein so armes, heute am Boden liegendes Land wie Deutschland glauben sollte, durch Judenhetze diese Frage lösen zu können [...]“ (Wäninger to all Bavarian local branches, 24 April 1924 [Bavarian Main Public Record Office, Section IV, *Stahlhelm* No. 347, fol. 4]).

⁸ 以下を参照。*Die Front der Anständigen!* *Der Stahlhelm* Vol. 8, No. 15 (11 April 1926).

の存在の必要性を認めざるを得なかった⁹。さらに、鉄兜団指導部は1920年代末までに、団の支持基盤の大半がナチスに共感しているか、彼らの運動を支持してさえいることを悟った¹⁰。他方で、ヒトラーとその支持者らは、より保守的な勢力を攻撃することによって、自分たちが追い詰められて孤立する危険を負うという結論にいたった¹¹。そのため、ナチスは論調を和らげ、反ユダヤ主義を根拠に鉄兜団を攻撃することを止めた。代わりにナチスの活動家らは、鉄兜団の政策や、革命を推進する力と内部の一貫性の欠如などに目を向けた。このような経緯とナチスの重要性の高まりが相まって、トップレベルでの両者の連携への道が開けた。1929年と1931年に、両運動の提唱者らは、陳情と住民投票の準備をするため様々な委員会に参加した。最初の陳情は、ドイツ政府に対し、第一次世界大戦の賠償金の支払を管理するため作成されたヤング案の受諾拒否を求めるものであった。二番目の陳情は、共和制を支持する諸政党が過半数の議席を保有するプロイセン州議会の解散を目指すものだった。どちらの試みも失敗に終わった後、この同盟は決裂し、ナチスは鉄兜団への攻撃を再開した。1931年の秋に自称「国民的反対運動」としてバート・ハルツブルクで開かれた大規模集会に参加した際、鉄兜団の指導部は、翌年の大統領選挙でヒトラーを候補として支持することも、それにより優位に立とうとするナチスの要求に従うことも拒否した。その結果、両組織の対立はエスカレートし、ついには暴力的な衝突に発展した。ワイマール共和国の最後の数か月間、ナチスの活動家と突撃隊 (*Sturmabteilung*) (SA) が、マルクス主義者と鉄兜団の団員のどちらをより憎んでいるか、見極められないことも度々であった¹²。しかし、1933年1月にヒトラーがドイツ国首相に任命されると、フランツ・ゼルテが入閣し労働大臣を務めた。プロイセン軍の元陸軍元帥

⁹ Protokoll der Bundesvorstandssitzung, 21.5.1926, p. 7 (Federal Archives, R72/5 fol. 105).

¹⁰ 以下を参照。Lenz an Bundesamt, 24 June 1929 (Bavarian Main Public Record Office, Section IV, Stahlhelm 79); Protokoll Bundesvorstandssitzung, 22/23 March 1930 (Federal Archives, R72/13, fol. 61); 以下も参照。Nußer, Horst G. W., *Konservative Wehrverbände in Bayern, Preußen und Österreich 1918-1933. Mit einer Biographie von Georg Escherich 1870-1941*, München 1973, p. 286.

¹¹ 以下を参照。Rösch, Mathias, *Die Münchner NSDAP 1925-1933. Eine Untersuchung zur inneren Struktur der NSDAP in der Weimarer Republik*, München 2002 (= *Studien zur Zeitgeschichte*, 63) (Zugl. Diss. Phil., Universität München 1998), pp. 157-165, 170-177.

¹² 以下を参照。Berghahn, *Der Stahlhelm*, p. 243.

にして参謀総長であったパウル・フォン・ヒンデンブルク大統領が、鉄兜団に愛着を抱いていたからである。にもかかわらず、両組織の対立は続き、最終的には1935年11月に鉄兜団は解散させられた。

1. 第一次世界大戦と準軍事組織の政治活動

退役軍人の組織として、鉄兜団は戦争の個人的な体験を度々引き合いに出し、この体験を、政治的運動 (*Bewegung*) としての団の自己像に結び付けようとした。この点で、鉄兜団とナチスの間には大きな相違があり、一つの旗の下に右派を団結させる試みを妨げていた。ドイツ軍が数に勝る英仏連合軍を相手に防衛に成功した1916年の1度目のソンムの戦いを基に、鉄兜団は、その政治的信条と団員の自己像にふさわしい、ヒロイズムという独自のイメージを編み出した。このイメージは、「胆力」「忍耐」「頑強さ」に加えて、「厳しい規律」に支配された「行動主義」に重きを置くとともに、塹壕戦で任務を遂行する一般兵に着目したものであった。この理想像は、兵士の多くはあふれる高揚感に駆られて戦うわけでも、義務を怠りたいわけでもなかったという、軍事史研究者による研究結果と一致する¹³。ゼルテ本人も中隊長としてソンムの戦いに加わり、重傷を負って左前腕を失っていた。彼は、戦後に自身の経験をもとに2編の小説と1編の戯曲を書き上げた。この戯曲は、1921年に鉄兜団の最初の団旗がマクデブルク大聖堂に奉獻された後で初演された。退役軍人向けの新聞数紙に掲載された複数の記事によると、鉄兜団の理念は、ソンムの戦いで兵士たちが耐えた集中砲火の中で生まれた心理と呼応するものだった。それはすなわち、別の記事で「新生ドイツ誕生の地ここにあり」と断じられたような心理である。ヒロイズムの特徴である勇猛

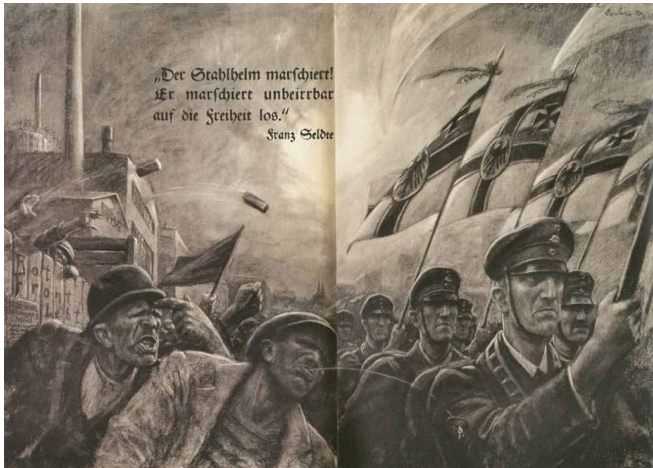
¹³ 以下を参照。Stachelbeck, Christian, *Deutschlands Heer und Marine im Ersten Weltkrieg*, München 2013 (= *Beiträge zur Militärgeschichte*, 5), p. 188.

果敢な攻撃性は、堅実性にとって代わられた¹⁴。工業化時代の大規模戦争で新たに登場した防衛的なヒロイズムに関わる同様のイメージは、フランス軍の前線兵士の書簡や、戦間期のオーストリア・ハンガリー帝国の退役軍人の認識が示すように、旧同盟国と旧敵国のいずれにも見いだすことができる¹⁵。そこで鉄兜団は、運動を展開する際に、1分間に114歩の緩やかなテンポで行進すべきである。これは1888年以来、プロイセン軍歩兵隊が採用してきた行進速度である——緩慢ではあるがたゆみなく着実に前進し、政界の抵抗や挫折に阻まれることはない。戦争の恐怖を耐え抜いた団員は、今度は逆境に直面し具体的な政治的勝利を手にはできずともなお、鉄兜団の運動に忠実であり続けねばならない。この自己像は、1932年のプロバガンダ冊子の挿絵に見事に捉えられている。

¹⁴ 以下を参照。Münkler, Herfried, *Der Große Krieg. Die Welt 1914 bis 1918*, 4th Ed., Berlin 2014, p. 463, 466; For articles in *Stahlhelm*-sources concerning the battle of the Somme 1916 cf. *Der Werdegang des Stahlhelm* (= *Feldgraue Hefte* Vol. 1); (Federal Archives, R72/334 Vol. 2), fol. 13; Goes, Gustav, *Das Magdeburger Inf.-Regt. 66 - die Wiege des Stahlhelm*. In: *Stahlhelm-Jahrbuch 1927*, im Auftrage der Bundesleitung des „Stahlhelm“, Bund der Frontsoldaten. Hrsg. von Franz Schauwecker, Magdeburg 1927 (Federal Archives, R72/337), p. 48; *Juli 1916 an der Somme*, *Der Stahlhelm* Vol. 8, No. 32 (8 August 1926).

¹⁵ 以下を参照。Ulrich, Bernd, und Benjamin Ziemann, *Das soldatische Kriegserlebnis*. In: *Eine Welt von Feinden*, pp. 127-158, 237-240; Beaupré, Nicolas, *Kriegserfahrungen, Zeitempfinden und Erwartungen französischer Soldaten im Jahr 1916*. In: *Materialschlachten 1916. Ereignis, Bedeutung, Erinnerung*. Im Auftrag des Zentrums für Militärgeschichte und Sozialwissenschaften der Bundeswehr, Hrsg. von Christian Stachelbeck, Paderborn [u.a.] 2016 (= *Zeitalter der Weltkriege*, 17), p. 338f; Hofer, Hans-Georg, *Nervenschwäche und Krieg. Modernitätskritik und Krisenbewältigung in der österreichischen Psychiatrie (1880-1920)*, Vienna [et al.] 2004, pp. 267-280.

図3: 「鉄兜団は行進する! 自由に向けてひるまずに進む」



出典: Die Stahlhelm-Fibel (Tempo 114). 鉄兜団連邦局宣伝部門編 (ベルリン、1932年)。

画面右側では、旗手を先頭にした鉄兜団が隊列を組んで右手に向かい行進している。退役軍人たちは工業団地を尻目に、明らかに左派として描かれた、自分たちを攻撃する労働者の一団を無視して進んでいる。労働者は行進する人々を批判し、レンガを投げ付けている。前景に描かれた労働者の一人は、画面一番手前の旗手に唾を吐き掛けている。それでも団員達は、一様に浮かべた決然たる表情が示すように、規律と「胆力」でこうした攻撃に対応している。彼らは行く手に集中しており、すぐさま反撃に転じる目立った兆しは見られない。この光景に、「鉄兜団は行進する! 自由に向けてひるまずに進む」というゼルテの言葉の引用が添えられている。

同時に鉄兜団の指導部は、自ら課したこの抑制を無感情、無反応、さらには無気力と誤解すべきではないと主張した。歴史を振り返っても、ドイツ陸軍が全面的に守勢に回ったことはなく、何度も繰り返し敵を攻撃することが可能であった以上、退役軍人同盟も同じようにあらねばならない。柔軟性と弾力性を備えたこの頑強性は、鉄兜自体の特徴——ニッケルクロム鋼とゴムという、異なる性質を備えた素材を組み合わせたもの——とも一致するものだった。その後、こうした

特徴がドイツ軍の(元)前線兵士にも引き継がれた¹⁶。このイメージは、鉄兜団の政治的戦略や組織内部の要請にも呼応するものだった。前述のように、団指導部は右派全体の統一を目指そうとしたため、異なる勢力の意見の相違や相反する利益の調整に多大な時間と労力を費やさざるを得ず、政治体制の速やかで確固たる変化を要求することはできなかった。加えて、右派準軍事組織の受け皿として、鉄兜団の基盤自体が極めて異質な集団から成り、指導部によるふさわしい政治綱領の策定の妨げとなっていた。1926年5月に連邦指導部の一員だったルードヴィヒの報告は、その結果として生じた団内部の統一性の欠如を次のように明確に伝えている。

「我々は現在、各地域の自警団を代表する多くの地区組織に分かれている。各地の鉄兜団の中には、共産主義者と戦う組織もあれば、政治に無関心で政治的意思もない在郷軍人会や伝統的クラブにすぎない組織もある」¹⁷

しかしながら、その結果として生まれた優柔不断で鈍重という印象は、鉄兜団がナチスと対決する際に深刻な脅威となった。後者は、若々しく決断力があり、革命運動さえ辞さないというイメージを打ち出し、ワイマール共和国末期の危機を急速に克服することを約束していた。そのため、ファシスト全般、わけでもナチス党が、第一次大戦中の「突撃歩兵」のイメージを好んで政治目的で利用したのも決して偶然ではない。突撃歩兵は、敵の重要拠点に奇襲を仕掛け、機関銃射撃の拠点のみならず退避壕をも破壊して、通常部隊による攻撃の道筋をつける任務を担っていた。突撃歩兵は、屈強で精神的に強い未婚の若い志願兵によって構成された。彼らは特殊な軍事訓練を受け、接近戦を想定した最新の兵器を

¹⁶ 以下を参照。Sonderausstellung. Stahlhelme vom Ersten Weltkrieg bis zur Gegenwart. Friedrich Schwerd, dem Konstrukteur des Deutschen Stahlhelms, zum Gedächtnis. Bearbeitet von Jürgen Kraus, Ingolstadt 1984 (= Veröffentlichungen des Bayerischen Armeemuseums, 8), pp. 82-83.

¹⁷ „Heute liegen die Dinge doch so, wir teilen uns immer noch in Bezirke, die landschaftsgemäss Selbstschutzorganisationen darstellen, solche, in denen der Stahlhelm gegen rot kämpft, andere, in denen der Stahlhelm in der Tat nichts anderes als ein Kriegerverein, ein Traditionsbund, politisch uninteressiert und ohne politischen Willen ist.“ (Minutes of the federal board meeting on 21 May 1926 [Federal Archives, R72/5, fol. 112]).

携行していた。したがって、第一次大戦で注目すべき最大の戦いは、ヴェルダンの戦いだった。同じ年にあったソンムの戦いを除いて、ドイツ軍は終始攻撃に徹していたため、戦闘をめぐる言説の中心は、特定の標的への猛攻にあった¹⁸。ドイツ軍突撃歩兵のエリート的な地位と攻撃的な戦術が、ナチス運動全体、特にその中の戦闘部隊による政治活動に引き継がれた。それに対して、鉄兜団は極右勢力の積極的な活動を抑制し、より保守的な政治闘争を支持するよう説得を試みた。被征服国の座に甘んじる忍耐と防衛も、力強い攻撃に劣らず重要である、と鉄兜団のプロバガンダは1932年に主張した。こうした理由から退役軍人らは、伝統的なドイツ軍人の美徳を基盤に据えて、ドイツ青年の前のめりな国家的理想主義の抑制力にしたいと考えたのだ¹⁹。両運動の抗争の激化を招いた一因である世代間対立²⁰や、1932年11月のドイツ国会選挙までにナチス党が獲得した政治的影響力を踏まえると、ここで言及されているのはナチスだと考えてよいだろう。

2. 鉄兜対鉤十字—政治的シンボルをめぐる対立

公然たる二つの運動の対立は、専ら政治的シンボルの領域で繰り広げられた。政治的象徴主義は元々、それ自体が歴史研究の題材とされていた。ワイマール共和国の没落に関する先行研究は、民主主義と共和主義の象徴はナチスの象徴

¹⁸ 以下を参照。Krumeich, Gerd, Die deutsche Erinnerung an die Somme. In: Die Deutschen an der Somme 1914-1918. Krieg, Besatzung, Verbrannte Erde. Hrsg. von Gerhard Hirschfeld, Gerd Krumeich und Irina Renz, Essen 2006, p. 323.

¹⁹ „Es gilt, die Tugenden des alten deutschen Soldatentums zur Grundlage und zur zügelnden Kraft des vorwärtstürmenden nationalen Idealismus der deutschen Jugend zu machen. Auf die Zähigkeit im Festhalten einmal erobelter Stellungen und im Abwehrkampf kommt es ebenso sehr an wie auf den Schwung des Angriffsgeistes.“ (Über den Parteien. In: Die Stahlhelm-Fibel, o. P.).

²⁰ 以下を参照。Weinrich, Arndt, Der Weltkrieg als Erzieher. Jugend zwischen Weimarer Republik und Nationalsozialismus, Essen 2013 (= Schriften der Bibliothek für Zeitgeschichte NF, 27), pp. 152-177; Olenhusen, Irmtraut Götz von, Vom Jungstahlhelm zur SA. Die junge Nachkriegsgeneration in den paramilitärischen Verbänden der Weimarer Republik. In: Politische Jugend in der Weimarer Republik. Hrsg. von Wolfgang Krabbe, Bochum 1993 (= Dortmunder historische Studien, 7), pp. 146-182.

に勝ることができず、この敗北が共和制の崩壊を招いたと結論付けていた²¹。現代の歴史研究者は、政治的シンボルという手段を通じて、ワイマール共和国の支持派と不支持派の争いを視覚的に記述している。両陣営の準軍事組織は、制服、旗、団歌や闘争歌を使って公共空間を占拠し、相手陣営の象徴を排除するか、それを圧倒しようと試みた²²。この種の抗争は、右派勢力内部にも見ることができた。例えば、バイエルンの鉄兜団組織で初代指導者を務めたヴェーニガーは、ナチスの極端な反ユダヤ主義を拒絶しただけでなく、自身の組織の行事における鉤十字の使用や「それに類した傾向の」歌の歌唱を禁止した²³。こうすることで、極右勢力が注目を集めて、彼らの主張を拡散することを制限したのだ。ミュンヘンで第10回全国年次大会を開催した際、鉄兜団は、ナチスの初期の拠点の一つであった同地で彼らに挑んだ。10万人以上の退役軍人がバイエルン州の州都に集まり、数度にわたる大規模行事で公共の場を占拠した。有名なレーベンプロイケラーでの集会の後、行進隊はバイエルン陸軍博物館前の戦没者記念碑に整列した。アウグスト・フォン・マッケンゼン陸軍元帥、アルフレート・フォン・ティルピッツ提督、フェリックス・フォン・ボトマー上級大将といった、第一次世界大戦を指揮した有名なドイツ軍の指揮官に加えて、バイエルン州司法大臣も、来賓として行事に参加した。その後、2,300本の旗を掲げた隊列は、ミュンヘン西部のダンテ・スタジアムに移動した。大掛かりな軍楽儀礼 (*Großer Zapfenstreich*) を経て、行事初日の締めくくりには花火が夜空を彩った。とはいえ最大の目玉はその翌日であり、制服姿の数万人の男性団員が、ミュンヘンの目抜き通りプリンツレゲンテン・シュトラッセにおいて、並み居る鉄兜団指導者を前に行進した。

²¹ 以下を参照。Buchner, Bernd, Um nationale und republikanische Identität. Sozialdemokratie und der Kampf um die politischen Symbole in der Weimarer Republik in der Weimarer Republik, Bonn 2001 (= Politik und Gesellschaftsgeschichte, 57), pp. 14-16, 361-362.

²² 以下を参照。Rossol, Nadine, Flaggenkrieg am Badestrand. Lokale Möglichkeiten repräsentativer Mitgestaltung in der Weimarer Republik. In: Zeitschrift für Geschichtswissenschaft Vol. 56 (2008) 7/8, pp. 615-637; Heise, Robert, und Daniel Watermann, Vereinsforschung in der Erweiterung. Historische und sozialwissenschaftliche Perspektiven. In: Geschichte und Gesellschaft Vol. 43 (2017) p. 8, 13.

²³ 以下を参照。Notes of the board meeting 5 October 1924 (Bavarian State Archives, Section IV Stahlhelm No. 330).

この行事の準備期間に、アドルフ・ヒトラーも来賓として招かれていたが、ヒトラーは出席を拒み、これみよがしにミュンヘンを避けた。代わりに、後にバイエルン州国家代理官 (*Reichsstatthalter*) となるフランツ・リッター・フォン・エップをナチス党代表として派遣した。さらにヒトラーは、ミュンヘンを訪れる鉄兜団の団員に友好的に接し、自主的に市内を案内するよう突撃隊に指示した。ただし同時に、突撃隊の行進への参加を禁じる厳しい命令を下した²⁴。いかなる条件下でも、ナチスの「褐色シャツ隊」が灰色の制服に身を固めた大勢の鉄兜団の単なる添え物になったり、突撃隊が吸収されるのではないかとの印象を与えたりしてはならない。逆にナチスは、この機を捉えて鉄兜団に対する、自らの近代性と優位性を誇示した。ミュンヘンの警察当局の報告によると、この行事中にナチスの機関紙『フェルキッシャー・ベオバハター』を宣伝する飛行機が使用されたという²⁵。ある記事でナチスは、群衆が頭上を旋回するこの飛行機を歓声を上げて歓迎し、ミュンヘン上空を舞う鉤十字があらゆる人の目に入ったと報じた²⁶。この集会自体が、極めて象徴的な性格を持つものだった。地上には、灰色の制服をまとった第一次世界大戦の歴戦の兵士らが展開し、今は亡きドイツ帝国の旗をかざし、1888年に導入されたプロイセン軍の伝統である1分114歩の速度で、足を高く上げて行進した。上空では、近代性、スピード、活力の象徴である飛行機が、ナチスのシンボルを掲げていた²⁷。鉄兜団が1年後にコブレンツに再び結集し、イタリアのファシスト党代表団を歓迎した際には、鉄兜団も飛行機を使って、自分たちの活動が近代的な国家主義運動であることをアピールした²⁸。

しかし、行事が終了した後は、ライバルの極右勢力のせいでミュンヘンの鉄兜団の存在感が薄れるおそれが生じた。その一方で両陣営は、ヤング案の受託に

²⁴ 以下を参照。Abstract of the report by the Munich police headquarters No. 79, 8 July 1929 (State Archives Munich, Pol. Dir München 10038, fol. 55).

²⁵ Ibid.

²⁶ 以下を参照。Der deutsche Soldat, in: Der Völkische Beobachter (Bavarian Edition) Vol. 1929, No. 126 (4 July 1929) (City Archives Munich, ZA-14361).

²⁷ ドイツの国民社会主義、イタリアのファシズムの象徴としての航空機とパイロットの使用に関する詳細な分析は Esposito, Fernando, Fascism, Aviation and Mythical Modernity, Basingstoke 2015 を参照。

²⁸ Der Stahlhelm Vol. 12, No. 40 of the *Der Tag des Aufmarsches* und *Die Ehrengäste* (5 October 1930) と題された記事を参照。

反対する陳情活動に備えて委員会で協力することに合意し、ドイツ全土に幾つもの小委員会が結成された。ドイツ国会選挙の数か月後に実施された第1回バイエルン州小委員会の準備期間中、鉄兜団の新たな指導者に就任した退役大佐ヘルマン・リッター・フォン・レンツは、今度は全国からミュンヘンに集まった数万人の支持者の存在なしに、鉄兜団として公共の場を占拠するという課題に直面した。例えば、ヒトラー、ドイツ国家人民党(DNVP)党首であるアルフレート・フーゲンベルク、それにレンツ自身が登場する予定の集会において、退役軍人と突撃隊は世話役を務めるよう命じられた。ミュンヘンの鉄兜団トップであるレンツは、共通のステージの中央に登場する予定であった、旗手を従えた「褐色シャツ隊」に対抗するために、できる限り多くの団員を動員し密集陣形で行進させて、鉄兜団の力を誇示する必要があると記している。数か月前の前の行事とは対照的に、退役軍人らが背後に追いやられるおそれがあった。1年後にツィルクス・クロネで別の行事が開催された際に、レンツは、ナチスを正式に招待することを拒みさえした。レンツは、大量の「褐色シャツ隊」の存在によって灰色の制服を着た鉄兜団がかすむのではないかと案じたのだ。他の都市や地域では、突撃隊が野次を飛ばす、悪名高いナチス党歌「旗を高く掲げよ」(*Horst-Wessel-Lied*)を歌う、右腕をあげてヒトラー式敬礼のポーズをとるなどして、鉄兜団の集会や大会を妨害した。同じく初期ナチスの拠点であったフランケン地方などの地域では、対立する陣営に悪用されるのを防ぐため、退役軍人らは内輪で集会を開くようになり、新たな団員や未来の支持者に向けた活動の範囲や効果に制約が生じていた。実際、地域によっては、こうした対抗策は極めて絶望的に思われた。ヒトラーがレーゲンスブルクを訪問し1,500人の聴衆を集めた時に、同市の鉄兜団組織の指導者は、自分たちが「まだ健在である」ことを示すため、一部の団員と共に市内を「歩き回る」ことにしたと記している。別の指導者は、ナチスの集会に参加した際、至る所に鉤十字が掲げられ、小さな子どもが右腕を伸ばしヒトラー式敬礼をする姿に衝撃を受けた。退役軍人らは何度も、公共の場でライバル陣営の存在に圧倒された。緊張が高まるなかで、鉤十字は団のシンボルとしての鋼鉄の兜の前にも立ちはだかった。鉄兜団は、灰色の制服姿の団員で広場やホールを埋めつくし、数で「褐色シャツ隊」を上回ろうとした。対してナチスは、ナ

チス党歌を朗唱して、鉄兜団の団歌をかき消そうとした²⁹。

とはいえ、時にはこうした対立が暴力的な衝突に発展することもあった。特に、1932年の大統領選挙で鉄兜団の指導者がヒトラー支持を拒否した後は、更に衝突が起きやすくなった。1年後にヒトラーがドイツ国首相に任命されると、衝突が再び高まりを見せた。ヒトラーの就任後に連邦指導者のゼルテが入閣したにもかかわらず、鉄兜団は、独立組織として存続を認められないことが明らかになった。この状況を受けて、ゼルテだけでなく、特に鉄兜団の第2代連邦指導者として影響力を発揮したテオドル・デュスターベルクは、ナチスの全体主義に立ち向かい、団の存続を試みた。デュスターベルクはナチスを公然と批判しさえし、かつての敵である、鉄兜団以上に脅威にさらされていた共和派の退役軍人会や政党のメンバーに呼び掛けた。早くも1933年2月の時点で、デュスターベルクは、社会主義者やカトリック教徒の中にも数十万人の元前線兵士が含まれ、彼らの愛国心の有無をナチス党が判断すべきではないと言明した。彼の狙いは明らかに、鉄兜団の立場を強化するためにかつての敵を説得し、仲間に引き入れることにあった。その結果として、ナチス政権は、デュスターベルクから権力を奪うようゼルテへの圧力を強めた。1933年4月、ゼルテは圧力に屈してデュスターベルクを追放した。その後交渉が開始され、鉄兜団の青年団員を1933年の秋にSAに編入する準備が進められた。最年長の団員のみが、ゼルテの指揮下に残ることになった。その一方で、デュスターベルクとその支持者らが望んだ通り、社会民主党、リベラル派、保守派など、解体させられた政党や結社の多くのメンバーが鉄兜団に加入した³⁰。ナチスの実力組織である突撃隊 (*Sturmabteilung*)、親衛隊 (*Schutzstaffel*) との間で、団の未来に関わる交渉が続けられる中で、鉄兜団下位組織の指導者らは、かつての敵を引き入れることによって、自組織の地位を強化しようとした。これを受けて団員数がほぼ倍増し、1933年5月には75万人から100万人に達した。ミュンヘンにあるバイエルン支部の新指導者である、退役騎兵隊大尉にして歴史学者、アーキビストであるオットー・フォン・ヴァルデ

²⁹ 以下を参照。Werberg, Dennis, *Stahlhelm – Nationalsozialismus – Neue Rechte. Der Frontsoldatenbund und sein Verhältnis zum Rechtsextremismus 1918 – 2000* (working title, to be published).

³⁰ 以下を参照。Meinl, Susanne, *Nationalsozialisten gegen Hitler. Die nationalrevolutionäre Opposition um Friedrich Wilhelm Heinz*, Berlin 2000, pp. 187-188.

ンフェルスは、この経緯を「極めて大きな、だが時には非常に望ましくない」成果であると評した。団員の急増が、ナチスに暴力的な介入の口実を与えたからである³¹。最も有名な事件は1933年3月27日に、国旗団 (*Reichsbanner*) が鉄兜団に統合されようとしていたブラウンシュヴァイクで起きた。この日、ブラウンシュヴァイク自由州のクラゲス首相 (ナチス党) が、両組織による合同集会を武力で解散させるよう命じたのだ。鉄兜団の団員2,000人と「マルクス主義者」1,000人以上が逮捕され、鉄兜団の州支部は解体された。クラゲス首相は、退役軍人が共同でクーデターを計画していたという情報を広めた。もう一つの事件は、6月下旬にプファルツ州西部のラウターエッケンで起きたものだ。人口が少ない農村地域である同地には、社会民主党支持者が多く参加する新たな地方組織が複数設立されていた。1933年6月23日の夜、突撃隊員と近隣のナチス強制収容所の職員計300人が、鉄兜団地区本部がある町ヴォルフシュタインに集結した。暴徒たちは、あるカトリック司祭を暴行し身柄を拘束した後で、地方組織の指導者であった退役軍曹フランツ・エデュアルト・クリンガーと彼に近い団員の自宅を襲撃した。クリンガーらは寝間着姿でベッドから引きずり出され、捕らえられて激しい暴行を受けた。その後数日のうちにクリンガーの健康状態は悪化し、郡庁所在地カイザースラウテルンの病院に入院したが1933年7月4日に死亡した³²。この事件に加えて、鉄兜団連邦指導部に団員を守る能力も意思もないことが明らかになったことから、プファルツ州西部の組織全体が崩壊する結果になった。暴行に抗議するために、そして更なる暴行への懸念から、鉄兜団の多くの指導者が辞任し、新たな為政者により従順な後継者に地位を譲った。最終的には、鉄兜団の立場の強化と拡大を目指す全ての試みが無に帰した。団員の大部分が突撃隊に編入され、最後まで残った組織も、ヒトラーが1935年にドイツの再軍備宣言を行った後に解散した。その多くが、ナチス党や、既にナチス政権に同調していた戦士連盟 (*Kyffhäuserbund*)、さらには政権に従順な他の組織

³¹ 以下を参照。Waldenfels, Otto Freiherr von, *Der Leidensweg des Stahlhelm*, p. 9 (Bavarian Main Public Record Office, Section IV, Stahlhelm No. 361).

³² 以下を参照。Werberg, *Stahlhelm – Nationalsozialismus – Neue Rechte* (to be published).

に合流した³³。

3. 新生ドイツに復活した古き鉄兜

しかしながら、元鉄兜団の一部は地下に潜って秘密裏に集会を続けた。かつての地方組織が、スポーツや趣味のためのクラブを隠れみのにした。第二次世界大戦後にこうした鉄兜団のつながりが、当初は組織同士の連携もなく再び表面化した。ある団員が公開書簡に記したように、1950年末には10ほどの組織が設置され「無数の定期的な集まり」が開催されていた³⁴。これらの集会は、1,000～2,000余りの戦後ドイツに数多く見られた軍人会に属していた³⁵。1951年2月、この同盟はフランクフルトで「デュスターベルクの鉄兜団の後継組織」として新たに設立された。この組織は人員、イデオロギー、政治戦略、シンボルの点で旧鉄兜団との連続性が強かった。創設者には、連邦指導部の指導者やメンバーや元連邦指導者の側近が多く名を連ねた。しかし、最高幹部のゼルテとデュスターベルクは既に他界していた。第一次世界大戦当時のドイツ軍が使用していた鉄兜と、帝政ドイツ時代の国旗の色——黒白赤——は、引き続き最も重要なシンボルとされた。政治的方針に関しては、設立当初のメンバーは、1933年までの鉄兜団の公式声明と酷似した12項目から成る綱領に合意した³⁶。彼らが宣言した目標

³³ 以下を参照。Gestapo Hannover meldet ... Polizei- und Regierungsberichte für das mittlere und südliche Niedersachsen zwischen 1933 und 1937. Bearbeitet von Klaus Mlynek, Hildesheim 1986, p. 460, 483, 493; Hering, Rainer, Konstruierte Nation. Der Alldeutsche Verband 1890 bis 1939, Hamburg 2003 (= Hamburger Beiträge zur Sozial- und Zeitgeschichte, 40), p. 158.

³⁴ 以下を参照。Open letter of Rosbach to the first district leader of Oldenburg, 31 December 1950 (Federal Office for the Protection of the Constitution, Zentrales Altaktenwesen (ZAW), No. 2735, p. 192).

³⁵ Schweinsberg が軍人会の数を1,000と推定する一方、Thomas Kühne は2,000余りの組織が存在したと示唆している（以下を参照。Schweinsberg, Krafft Freiherr Schenck zu, Die Soldatenverbände in der Bundesrepublik. In: Studien zur politischen und gesellschaftlichen Situation der Bundeswehr, ed. by Georg Picht, Berlin 1965 (= Forschungen und Berichte der evangelischen Studiengemeinschaft, 21), p. 105; Kühne, Thomas, Kameradschaft. Die Soldaten des nationalsozialistischen Krieges und das 20. Jahrhundert, Göttingen 2006 (= Kritische Studien zur Geschichtswissenschaft, 173), p. 93)。

³⁶ 以下を参照。Tauber, Kurt P., Beyond eagle and swastika. German nationalism since 1945, Middletown 1967, pp. 320-321.

には、元前線兵士・将校を結集して右派政党を包括する連合を結成し、国家を分断する亀裂を戦争体験に基づき乗り越えることが含まれた。とはいえワイマル時代とは異なり、新指導部は、戦後ドイツのコンラート・アデナウアー政権に忠実な者、民主主義を敵視する急進的な準軍事勢力、政治に関心のない退役軍人といった組織内の様々な派閥を統合できなかった。派閥間の緊張に、2人の元連邦指導者の支持者同士による対立の再燃が相まって、新組織は分裂した。最初に、新たな指導者でデュスターベルクの側近であった退役軍曹カール・サイモンが、元突撃隊高官でゼルテの最も重要な支持者であったトマス・ギルゲンゾーンによって追放された。その後、サイモンは独自に組織を結成し、あらゆる機会を捉えて鉄兜団と戦った。サイモンの後継者である退役陸軍元帥アルベルト・ケッセルリンクが、ドイツ帝国を象徴する黒白赤の団旗を、黒赤金のドイツ連邦共和国の国旗と同等の地位にまで高めるという計画を発表すると、再び分裂が起きた。さらにケッセルリンクは、社会民主黨員や労働組合員も鉄兜団に受け入れようとした。その結果、組織を根底から揺るがす混乱が生じた。これを受けて、幾つかの支部が独立し、軍事色と反社会主義的な性格が強い別組織である前線兵士同盟 (*Bund der Frontsoldaten*) を結成した。残る本体組織自体も、初代連邦指導者のケッセルリンク、連邦事務局 (*Bundesamt*) トップのギルゲンゾーン、それに2代目連邦指導者のレーマンをそれぞれ支持する退役軍人に分裂した。鉄兜団は第一次世界大戦の退役軍人組織としての姿勢を貫いたため、第二次世界大戦の退役軍人にはほとんど対応することができず、時が経つにつれて組織の高齢化が進んだ³⁷。

ケッセルリンクの後任であるクルト・バルトが1964年に世を去ると、鉄兜団は方向性を転換した。ギルゲンゾーンの支配から脱するために地域組織の指導部は団結し、騎士鉄十字章 (*Ritterkreuz*) ——ナチス時代の軍最高位の勲章の一つ——を受けた退役中尉ヴィルヘルム・マッサを連邦指導者の座に推した。マッサは、団内の敵から力を奪い、ドイツ連邦共和国とたもとを分かち、極右組織・政党から成る既存のネットワークに鉄兜団を合流させた。マッサは、縮小する支

³⁷ 以下を参照。Supplementary Report, 1 February 1955 (Federal Archives, BW7/2754, fol. 130, 134, 136).

持基盤を安定させて新たな団員——退役軍人が実施する準軍事教練に参加する若者も含めて——を呼び込もうとした³⁸。にもかかわらず、鉄兜団の幾つかの支部は、ドイツ連邦軍 (*Bundeswehr*) の部隊と接点を作り、これを維持することができた。退役軍人らは、新生ドイツ軍に影響を与え、戦争経験のある元兵士として自分たちが評価されることを望んでいた。他方で、多くの軍高官は、更に兵士を募集し正規軍で軍務に就く意欲を高めるために、鉄兜団を信頼の置ける軍人会の一つとして利用する計画を立てていた。特に1960年代後半は、ドイツ社会全体で自由化を望む風潮が勢いを増していた。抗議運動では、武装解除や平和維持を目的とする東側ブロックとの交渉が叫ばれた。軍内外の保守派の視点から見ると、こうした傾向は、軍の国防能力を脅かすものであった³⁹。そのため、この風潮に対抗するために軍人会との協力が利用されたのだ。鉄兜団とのつながりが公になることで、連邦軍やドイツ連邦国防省が犯罪事件に巻き込まれることもあった。最も有名な事件は、ラインラント＝プファルツ州の温泉保養地バート・ベルクツァバンで、1966年に鉄兜団の地方支部が新たに設置された際に起きたものだ。近くに駐留していた第768通信大隊の兵士多数が設立行事に参加し、連邦軍のある下士官が主導的な役割を担った。この行事の中で、一人の元ナチス党職員が、ナチスの歴史的に大きな成果としてボルシェビズムからの防衛をたたえる演説を行い、ヨーロッパにおけるユダヤ人大量虐殺を相対化して、ドイツは再び東方に進むべきだと宣言したのだ⁴⁰。その結果として、この新組織は解体され、行事の発起人となった兵士らは懲戒処分を受けた。連邦議会における軍事監察委員 (*Wehrbeauftragter*) が兵士への教育強化を要求し、ドイツ連邦国防省は翌年、歴史研究に基づき、ワイマール共和国時代の鉄兜団に対する初の正

³⁸ 以下を参照。Werberg, *Stahlhelm – Nationalsozialismus – Neue Rechte* (to be published).

³⁹ 以下を参照。Dörfler-Dierken, Angelika, *Die Bedeutung der Jahre 1968 und 1981 für die Bundeswehr. Gesellschaft und Bundeswehr. Integration oder Abschottung?* Baden-Baden 2010 (= *Militär und Sozialwissenschaften*, 44), pp. 26-31.

⁴⁰ 以下を参照。Bill of Indictment, pp. 3-4; Letter of the German Federal Disciplinary Attorney (*Bundesdisziplinaranwalt*) to the German Federal Ministry of Defence 1 June 1966 (Federal Archives, BW1/66145).

式な批判を発表した⁴¹。

就任後10年以上を経た1975年に、ヴィルヘルム・マッサは連邦指導者を辞任した。彼の後任は新たな方針をとり、極右過激派から距離を置いて軍の伝統と仲間意識に重点を置いた。この転換が、更なる緊張、脱退、排除につながった。最終的には計約730人の団員が残った。影響力が縮小し、幹部レベルに過激主義的な傾向が見られなくなったため、ドイツ連邦憲法擁護庁 (*Bundesamt für Verfassungsschutz*) は、鉄兜団に対する監視を中止した。1990年代に、ニーダーザクセン州の小規模な地方紙数紙で鉄兜団が最後に1度だけ取り上げられた。フランツ・ゼルテ・ハウスが、極右過激派による軍事訓練の拠点としてメディアで報じられたのだ。2000年について指導部は連邦レベルで鉄兜団の解散を決定した。恐らくは禁止されたナチスの紋章入りの商品をドイツに輸入しようとした疑いで起訴されるのを避けるためであろう。これ以降、記録からもドイツの右派・極右の活動からも同団の存在を示す兆候は消えた。

おわりに

結論として、鉄兜団一前線兵士同盟は20世紀のドイツにおける右派運動であり、ナチス政権誕生前夜に右派を結集しようとした最後の試みであった。したがって、鉄兜団の指導者は同じ右派であるナチスの競争相手にしてライバルであった一方、支持基盤の大半が実際にはナチスに共感していた。両陣営の緊張の高まりは、シンボルの対立として表面化し、鉄兜団の鋼鉄の兜、灰色の制服をまとった隊列、帝国軍旗、団歌、敬礼などに、ナチスは鉤十字、褐色シャツ、党歌「旗を高く掲げよ」、ヒトラー式敬礼をもって対抗した。1933～1935年に、鉄兜団は野党勢力の最後のるつぼの一つとなり、逆説的ではあるが社会民主主義、リベラル、保守といった諸勢力の受け皿となった。こうした新たなメンバーが団に参加した理由は、その政治的背景と同じくらい多様であった。ナチス政権とは根

⁴¹ 以下を参照。Annual Report of the Parliamentary Commissioner of the Armed Forces (*Wehrbeauftragter*) 1965, p. 13; *Der Stahlhelm. Der Bund der Frontsoldaten in der Weimarer Republik*, in: Information für die Truppe. Hefte für staatsbürgerliche Bildung und geistige Rüstung Vol. 5 (1967), pp. 316-329.

本的に相いれず抵抗を試みた者もいれば、単に迫害を逃れようとした者もいた。ドイツ帝国の復興という理念に共鳴し建国への参加を望みながらも、ナチス突撃隊の革命主義におじけづいた者もいた。単にナチス以外の組織とのつながりを維持したい者や、中立的な立場を守りたい官吏もいた。とはいえ、大部分の事例において彼らの反発は根本的なものではなかった。したがって、ナチスに対する抵抗運動のとりでとして最晩年の鉄兜団を美化するのは誤りだろう。この退役軍人による同盟は、団員の大多数がファシズムに共感していたとはいえ、純粋なファシストを代表するものではなかった。鉄兜団は、旧来の君主主義者と比較的過激な新右翼の間に位置する、ドイツ右派内の反リベラルで権威主義的な潮流を反映したものだ。団の指導部は、議会制民主主義にますます強く反発し、陸軍元帥であるフォン・ヒンデンブルク大統領への政治的権力の集中を歓迎していた。そのため、鉄兜団がナチスの台頭、さらには民主主義の最終的な崩壊への道を開いたのだ。いずれにせよ、ナチスはこの旧敵との戦いを続けた。

鉄兜団が解散した後も、退役軍人らはつながりを持ち続け、スポーツや趣味のクラブを装って集会を続けた。第二次世界大戦でドイツが全面的に敗北し占領されたのち、こうした組織は再び登場し復興を図ったものの、ほとんど成功しなかった。適応する意欲や能力の欠如と派閥間の内部抗争が相まって、組織全体の衰退につながった。鉄兜団は、ワイマール時代の最も有力な右翼退役軍人団体という地位を取り戻すことはできなかったのである。